

## 共同研究の記憶

——「村上春樹と大江健三郎」のことなど——

中原 章 雄

僕と間宮中尉は井戸の底によって結びついている。間宮中尉の井戸はモンゴルにあり、僕の井戸はこの屋敷の庭にある。ここにはかつて中国派遣軍の指揮官が住んでいた。すべては輪のように繋がり、その輪の中心にあるのは戦前の満州であり、中国大陸であり、昭和十四年のノモンハンでの戦争だった。

村上 春樹『ねじまき鳥クロニクル』

### はじめに

かなり以前のことになる。立命館大学の二十世紀末の急速な進展と、今世紀に入っても続いている歩みを考えるならば、一層以前のことと思われるであろう。

本稿で私が書きたいのは、人文科学研究所を基盤にはじめられた総合研究という名称で呼ばれた共同研究のことである。私は、この共同研究の第二期に、専任研究員としてかかわったのであった。

冒頭に、かなり以前のことと断ったのであるが、見方を変えようと、後述するように必ずしもそれほど以前のこととは言えないかもしれない。私たちの研究課題は、当時の日本における危機の研究であった。

文学部選出の専任研究員として、私は、文化・イデオロギーの危機を

担当することになっていた。文化・イデオロギーというのは、第一期の研究を継承したものである。私が研究員になってから研究の具体化について相談した哲学専攻の長老教授は、イデオロギーでなく、思想ではないかという意見で、私も同感であった。もつとも、研究会で変更を提案しなかったが、いま考えると、当時の学内の共同研究では、やはりイデオロギーに落ち着いたであろう。

第二期の研究会では、なかなか自分の問題を絞り切れず、模索と困難を重ねた末に、私は数人の現代作家を取り上げるようになったのであるが、その一人は村上春樹であった。

今日、村上春樹はミリオンセラー作家であり、インターネットで彼の名前を検索すれば、それに相当する件数の彼への言及が見いだされるであろう。しかしながら、当時の村上は、文学界の新人であり、しかも一般には、ノンジャンルな、アメリカ小説を多読し、アメリカン・スタイルの生活を楽しんでいる新人とみなされていたようである。したがって、危機の研究とは無縁の存在と考えられる恐れがあった。

村上を対象とすることに、他の社会学部の研究員から異議が出る可能性は十分にあった。私には、それだけに、手続きを考慮せねばならなかった。

だが、私は先を急ぎすぎたかもしれない。総合研究と呼ばれた共同研究の初期の状況について、若干の説明から始めるべきであろう。

## 1 総合研究の始まり

第一期の総合研究は、人文科学研究所が一九八〇年から三年にわたって行った学際研究「戦後日本社会の構造変化と国際化」の成果としてまとめられた。それらは、六巻から成る研究書として有斐閣から刊行された。

文化・イデオロギー部門を担当した文学部は、「戦後価値の再検討」という題名でまとめられ、第六巻として出版された。これは、西川長夫研究员の下に、文学部教員のほか、学内外の二十人近い人々による、ほぼ同数の研究会が開かれ、その成果を纏めたものであった。この巻には、序章のほか、十二編の論文と証言が収録されている。

かなりの期間にわたる研究会があり、それに見合った人々が参加し、それがまとめられて刊行されるという経過は、どこの大学、どこの研究会でも普通のことであろう。しかしながら、当時の立命館大学文学部は、共同研究を行う条件からいえば、特別な立場に置かれていた。

一つは、大学紛争の後遺症から、その当時の文学部はまだ完全には癒えていなかったことがある(その一つの深刻な例は後述する)。もう一つは、九専攻などに分かれている文学部は、専攻の壁を乗り越えての共同研究はかなりの困難を伴ったことである。すべてに教学的に共同化を志向する傾向のある立命館では、紛争以後、繰り返しこれは、文学部の特徴として指摘されることが多かった。

他学部の意向はどうあれ、実際に共同研究が容易でなかったことは否定できない。けれども、その壁を突破しえたのは、何と云っても、西川委員の獅子奮迅ともいべき行動とリーダーシップがあったからであった。

第六巻の「まえがき」は、第二期の研究員を務めた私が執筆している。私自身、まったく久しぶりにこの文章を読んだのであるが、呆れたことに、前任者の精力的な役割については、何の言及も行っていない。

これは、取り返しのつかない過ちであり、三〇年近く経ってしまったが、ここで深くお詫びするしかない。

一二編の論文と証言の中には、六人の文学部教員が含まれている。西川研究員(のち国際関係学部に移籍)のほか、長田豊臣、服部健二、木村彰吾、山尾幸久、石井美桑雄の諸氏(論文掲載順)である。

このうち、木村、石井両氏は故人である。石井さんについては、昨年の『立命館文学』の追悼号に私は寄稿している。木村さんが亡くなってから、もう二〇年程たつが、その時はまだ五〇代の若さだった。私は甲辞を読み、その際に、この論文集に木村さんが寄稿したサルトル論の結びにある、「サルトル的なものは、着実に新しい伝統として息づき始めている」という言葉を引用したことを覚えている。

長田さんのユニークな「山びこ学校」論には別種の記憶がある。渡米中の著者に代わって、専任研究員の私が校正を行うことになっていた。他人の論文の校正はそれまでに経験もあったが、論文は渡米前にあわただしく清書されたらしく、明らかに同一の人物と判断される人物が、別姓で登場するには困惑した。自分の責任で校正したが、どこからも苦情は出なかったと思う。

西川研究員は、論文提出の締切にも厳格であった。ところが、八二年度の終わりという、全学の申し合わせ通りの締切に間に合ったのは、驚くべきことに、第六巻の文学部だけであつたらしい。すでに述べたように、紛争以後の他学部の文学部に対する厳しい眼差しは、このことによつて、なにごとか逆転したことになる。

結局、全巻の成果刊行が完了したのは、三年以上も遅れて、一九八六

年のことであった。これほどまでに遅れたのは、執筆者に多忙な役職者なども動員した学部もあったからであろう。とはいえ、大学の研究を促進するはずの制度が、研究の弱さを明らかにする結果となってしまった。こうして、第二期の共同研究は、第一期の過ちに学ぶところから出発することになる。すなわち、専任研究員を中心とする、比較的小人数の共同研究となった。

危機の研究は、危機概念の検討から始まった。レーニンの危機概念の検討会がかなり続いた。「マル経」の牙城と言われた、大阪市立大学のレーニンの専門家を講師に招くこともあった。今日から見ると異様ではあっても、当時の大学では、それが研究の当然の筋道であったのだろう。ところが、夏休みも近くなったころであろうか、研究会に出てみると、今までと雰囲気が違う。いつも活発に何度も発言する人の口が妙に重い。リーダー役の所長も、終始なんとなくきこえない。私は狐につままれたような気がするうちに、研究会はなんとなく終わってしまった。

じつは、前衛的な政治組織が、危機という語を乱用するなどという指令を出したらしい、との情報を私知ったのは、どのようにしてであったろうか。研究会のメンバーには、だれもそんな情報を教えてくれる人はいなかった。文学部の同僚でもそういう人は私の近辺には皆無であった。それはともかく、以後、研究会の進行は明らかに変わってしまった。もうレーニンが存在感を示すことはなくなった<sup>①</sup>。

## 2 文化・イデオロギーの危機に向かつて

研究会の雰囲気は変わったが、八〇年代の危機に関する、私の文化・イデオロギーの研究は遅々としてすすまなかった。

他の社会学部系の研究員たちは、各自の専門分野、あるいはその近接

の領域を特定化すれば、今回のテーマと結びつくであろう。ところが、英文学を専門とする私の場合には、何も接点がない。もともと、日本史や日本文学の専門家であったとしても、必ずしも事態は容易ではなかったであろう。

専任研究員二年目の中間報告は、四点ばかりの課題を列挙して簡単に説明を加えることで切り抜けた。しかしながら、最終年度の三年目が始まってからもなかなか問題は煮詰まってこなかった。

文学部の同僚や相談できる人の知恵は借りたが、結局は自分で決断するしかない。困り果てているうち、小説家の大江健三郎がそのころ、「窮境」という表現を繰り返し使っていることに気が付いた。

当時大江は、順調に、また活発に作家活動を続けているように見えた。しかしながら、二十年以上にわたって作家活動を続けてきた中年の小説家として、一つの転機を迎えつつあることを自覚していたのであろう。時代は、戦後の「総決算」を呼号する中曽根内閣が登場していた。戦後文学を継承するということを旗幟鮮明にしてきた大江にとって、自己の立場を確認することを迫られていたはずである。

さらに大江は家庭の問題でも対処を迫られていた。彼は障害児を育てる父親であった。大江は子供の誕生時から、そのことを小説に描いていた。いま、中年の父親として、また作家として、障害を持つわが子とどう向き合うのか。

大江のいう「窮境」という語には、これらの問題が絡まりあって居るのであろう。このように考えると、時代を代表する小説家大江の「窮境」は、そのまま八〇年代の日本の危機とかかわらざるを得ないであろう。

とはいえ、大江の立場に接近し、その説明を行うだけでは、われわれの課題に十分に答えたとは言えないであろう。なお苦慮を重ねているうちに、大江自身がヒントを提供してくれた。

大江は、村上春樹の文学をかなり辛辣に批判していたのである。当時の村上春樹は、言うまでもなく現在のミリオンセラーの小説家ではない。すでにいくつかの作品を発表し、文学賞も獲得しているが、芥川賞ではなく、新人賞であった。

一方、大江は文壇の重鎮ともいべき存在である。その大江が、作家歴の乏しい新人を辛辣にことさら批判するのは、どこか異様な感じがするように私には思われた。いや、そういう二人の関係よりも、批判自体が正しくないと思ったのである。ともあれ、中堅作家と新人の双方から危機に迫る道が見えてきた。

### 3 研究会成果のまとめ

専任研究員の研究会は、三年目の学年末に各自の素稿を持ち寄って、まとめとなる検討会を開いた。妙心寺近くの小さなホテルに泊まりこんで、合宿の検討会であった。

私は報告内容に全く自信がなかったが、ともかくも検討会に間に合うように原稿をまとめた。

先に述べたように、他の学部の研究員は各自の専門分野の蓄積を活用すれば、それほど困難な仕事ではなからうと私は考えていた。ところが、この時も驚いたことは、二人ほどの研究員は、まだ原稿が完成していない、メモ程度の報告であった。

合宿検討会の討論については、詳しいことは覚えていない。ただ、二つのことだけを鮮明に記憶している。とりわけ私自身にとっては、それだけが重要なことであった。

一つは、二人ほどの研究員の報告について、かなり厳しい意見が出たことである。その意見は、どちらのペイパーに対しても、教科書的ある

いは概論的だということであった。

これは私の観測になるが、こうした批判が露骨なほど出たのは、それらのペイパーが日本の社会科学の従来からの民主的路線を修正することなく忠実に踏襲しすぎたことにあるのではないかと思われた。

二つ目の点は、私自身の報告に関してである。結論を言えば、なんとか合格点を得られたらしいということであった。

これも先に述べたように、この時のペイパーは、研究会の報告というよりも、教学総括を書くような義務的な気持ちで何とか仕上げたのであった。それだけに、安堵の気持ちは、強烈で忘れがたい。

とりわけ、村上春樹は、文学の読者の間ではすでにかなり知られてきたにせよ、この新人小説家は立命館の社会科学者の間でも、いわば認知されたことになるだろう。

こうして、われわれは研究会の成果をまとめることになった。

成果は上下二巻にまとめられ、法律文化社から出版された。しかしながら、出版までにはなお時間を要した。私自身は、検討会の報告をほぼそのまま出版原稿にするつもりであったが、全員の原稿がなかなか揃わなかった。結局、私は成果の論文集が出版されるまでに、その間に発表された大江健三郎の『懐かしい年への手紙』論を加えて論述の整備を図ったが、骨格は全く変えなかった。

論文集には、文化・イデオロギーの部門では、当時は文学部教授であった西川長夫さんの三島由紀夫論が収録されている。もしこの力作のインパクトが、今日の読者には、仮にそれほど伝わらないとするならば、今の情勢が、三島という「劇薬」をすでにかなり超えてしまっているからかもしれない。

#### 4 現在の大江健三郎と村上春樹

最近行われたインタビューの中で、大江健三郎は、かつて自分が下した村上春樹の初期作品『風の歌を聴け』に対する評価を訂正しつつ、次のように述べている。

私はあのしばらく前、カート・ヴォネガットをよく読んでいたので、その口語的な言葉の癖が直接日本語に移されているのを評価できませんでした。私は、そうした表層的なものの奥の村上さんの実力を見抜く力を持った批評家ではありませんでした。

大江の苦しい弁明にもかかわらず、問題は、「カート・ヴォネガット云々」「批評家云々」だけではないであろう。私が研究会で引用したときの大江の発言は次のような手厳しいものであったのだから。

いかなる能動的な姿勢も持たぬ人間が、富める消費生活の都市環境で、いかに愉快地にスマートに生きてゆくか？そのモデルを、幾ばくかの澄んだ悲哀の感情とともに——それは同時代の世界、社会からさす淡い影を、しかしくつきり反映している感情です——提示しているのが村上春樹の文学です。

大江は当時は、このように断定、いやむしろ断罪していたのであった。ここには、村上春樹という次世代の作家の才能を、見抜けないというよりも、見抜いたが故の同業者の嫉妬が隠されているのかもしれない。

村上春樹は、このような発言にどう対処していたであろうか。直接、大江発言に答えたわけではないが、例えば彼は、村上龍との対話でこう

語っている。次の引用文も、私は研究会の報告で引いている。

僕の小説はね、アメリカの影響受けすぎて叩かれるわけですよ。でも僕はね、そうは思わないわけ。たとえば、アメリカだって、ほかの影響を受けてるわけじゃない？社会経済の部分であれだけ交流が行われて、ソフトウェアの部分で交流はほとんどなくて、日本的なものがやっぱり中心に据えられてるわけでしょう。それに対するアンチテーゼがなきゃね、僕はウソだと思う。

研究会の報告では、なお村上の反論を紹介している。しかし、ここでは以上で十分であろう。これ以後、村上は『ノルウェイの森』で一躍有名になり、さらにその後、活躍を続け、大江を凌ぐほどの存在になっている。大江の自己批判は、むしろ出し遅れのようにさえある。

今年（二〇一二年）の初秋、私は京都市内のある大きな書店に入った。その書店では文芸雑誌の棚に、村上春樹特集を組んだ雑誌が二種類も置かれていた。いかにも若者向けの雑誌らしく、村上文学がいかにも若者にアピールする点が多いかを、両者ともに全面的に強調した特集になっているようであった。

確かに、そういう点はあるだろう。また、村上が、かつての大江健三郎がそうであったように、とりわけ若い読者層を意識していることも事実であろう。

しかしながら、ここで見たように、村上春樹はいわゆる全共闘世代であり、八〇年代の初めにデビューした小説家であった。同世代の一般の社会人なら第一線から退く年齢である。明治期の小説家なら、夏目漱石は彼より一〇歳若くして死に、森鷗外はほぼ同じ年で亡くなり、島崎藤村は、維新を題材とした、晩年の枯淡の境地を示す歴史小説『夜明け前』

を執筆し始めた頃である。

村上春樹は、若者向けの顔を修正して、どのように現代の日本の危機に立ち向かうであろうか。だが、もちろん本稿の目的は、「記憶」であって、未来ではない。

### おわりに

私たちの共同研究が終わり、成果も刊行されてから、すでに三十年近く経つ。

その三十年間に、世界も日本も激しく変わった。そして、日本の大学、とりわけ立命館大学も著しく変化した。しかしながら、「危機」の研究に従事している間、私たちの研究会のメンバーは、足元の危機はあまり意識しなかったようである。

けれども、実際には、八十年代の中頃は、立命館大学においても大きな転換を迎えていたはずである。ここでは、もちろん、大学を論ずべき場所ではない。けれども、一言だけ私見を述べれば、あの時期に大学は軟着陸によって危機を乗り越えたのであった。それは、恐らく、キャンパスの統合、元老西園寺公望の国際派のアイコンとしての再登場、と三位一体のものであったろう。その選択は、おそらく賢明だったに違いない。しかしながら、学内の一部では囁かれながら、危機の研究会では、自分の足元に目を向けなかったという現象のつけは、もう一度共同研究に値するかもしれない。

### 〔補説 1〕講演会のことなど

当時は、人文科学研究所主催の講演会があった。その講師を選ぶのが選任研究員の仕事であった。わたしの任期中の講師で記憶しているのは、

松本清張、井上ひさしのという、お二人である。言うまでもなく、著名な作家であるが、私たちが講師をお願いした時期は、おそらく人気とともに絶頂の頃であったと思われる。松本清張は、今日も高名な推理小説家であろう。けれども、ここで忘れることのできないのは、彼が立命館で講演するよりも数年前に果たした政治的な役割である。

松本清張は、日本共産党宮本顕治委員長と、創価学会の池田大作会長の二人を仲介して、「ファシズムの危機を食い止めるため」の会談を自宅で実現させて（『松本清張全集66巻』の年譜による）人々を驚かしたのであった。しかも、当時は、両勢力とも今日よりもはるかに国会で多くの議席を保持していて、国政を左右しかねない情勢であった。多忙を極める人気作家に講演会の講師を務めてもらえたのは、このあたりの人脈が当時の立命では可能だったのであろう。

もともと、当日の話の内容は、私がすでに知っていたような、二番煎じか、三番煎じの、小説の苦労話であった。けれども、会場から控室に向かう途中で、中年の女性の二人連れが「面白かったね」と語っているのを聞き、控室で清張氏にそのことを言うと、意外に無邪気なほど、相好を崩したことを覚えている。それとともに、人気作家の孤独を垣間見たような気がしたものである。

井上ひさしさんの場合も、『吉里吉里人』がベストセラーになっていた時期で、この人もまた人気絶頂であった。確か、まだ離婚さわぎの前で、彼が主宰する劇団のことも何かと話題になっていたところである。

私は井上文学はほとんど知らなかったが、京都駅に迎えに行く役になり、当日の司会も務めた。駅からの車中で英文学が専門だと自己紹介したので、てっきりシェイクスピア研究者と思い込んだようで、どうやら実作者の立場から、日本のアカデミックなシェイクスピア研究への皮肉を、最初にひとくさり楽しそうに語ったことを覚えている。ところが、

そのあとの話は全く記憶していない。けれども、この人は講演後の懇親会では気さくな面を感じさせた。ちょうどプロ野球の在阪球団が久しぶりに優勝した直後で、京都に来る前に泊った大阪の街がどよめいている様子を、劇作家らしい口調で面白く語ってくれたことは、今も忘れがたい。

専任研究員の任期中ではないが、人文研主催で忘れがたい講演会がもう一つある。それは、文芸評論家の荒正人さんの講演会である。「京都と漱石」という演題であった。いかにも詳細を極めた漱石年譜を作成した人らしい克明な京都での漱石の足取りに関する講演であった。講演後の懇親会には、私も文学部教員として出席していた。何よりも覚えているのは、資料魔らしいこの人の持っていた、途方もなく巨大な、恐ろしく古ぼけて変色した革靴であった。

けれども、それ以上に忘れえないことがある。日頃の大学にしてはのんびりとした料理屋での懇親会を楽しんでいる間に、広小路キャンパスでは、とんでもない事件が起こっていたのである。F君事件と呼ばれる、学生間の刃傷沙汰である。

鋭利な刃物が凶器として学生集団の中で白昼に使われるということ、さまざまな暴力が振るわれた一九六九年の凄まじい学園紛争時においてさえ、ほとんどなかったはずである。立命館大学の学園史においても、この事件はかなりのページを費やして記述されている。にもかかわらず、真相はなお解明されていない部分がある。

さらにもう一つの講演のことを付け加えておきたい。それは、フランス文学者の桑原武夫さんの日本語の未来に関する講演である。何よりも、戦後には俳句第二芸術論で知られた、フランス文学者は、日本語に関する関心の鋭さでも有名であった。

講演は、第一期の総合研究の時に、いわば拡大研究会として一九八一

年に行われたものであった。

当時の文学部教員を中心に執筆・編集された、『戦後価値の再検討』の巻に、この講演は収録されている。わたしも次期の専任研究員としてその時は出席していた。

今も目に浮かぶのは、桑原さんが東芝の工場に初期のワープロを見た行った時のことを、ジェスチャーたっぷりに語ってくれたことである。ワープロは「仮名文字タイプライターのようなもの」と説明されているが、東芝へでも見にゆかないと、一般には目にするのができなかったのである。

まもなく初期の高価で原始的なワープロが市販されるようになり、八〇年代の半ばには私のような大学教員でも購入できる値段になっていた。実際、ワープロがなかったならば、危機の研究というような、専門とは無縁の分野に関する報告を準備することはできなかったであろう。講演に戻ろう。桑原さんは、見たとおりに説明している。

まず、「ほんじつはせいいてんなり」と仮に打ちまして、そして「変換」というキーを打ちますとね、「本日」と「晴天」という字が漢字になる、なれないと打つのに暇がかかりますけどね。

今日この牧歌的な記述を読むと、まことに微笑ましい気がする。桑原さんは言語の機械処理について語っているのだが、私はここで語られた機械を自分が数年後に使えるようになろうとは夢にも思わなかった。同時に、そのワープロが自分の定年の頃に消滅してしまうということも、もちろん考えることはできなかった。だが、これは老人の個人的な感慨ということになろう。

それよりも注目されるのは、この講演でもベストセラー『吉里吉里人』

が言及されていることである。桑原さんは、東北共和国の発想によって「方言の株が上がっている」こと、地方分権主義の意図は認めながらも、日本という「均一的な統制的な国」での方言の可能性の限界について述べようとしているようである。

八〇年代の立命館大学において、危機の研究という課題に対処することを迫られ、その研究会に常時出席し活動することを義務づけられ、私は一種の閉塞感を味わうことになった。けれども、外部の様々な異質の優れた人々に接する機会を得たことには、率直に感謝すべきであろう。しかも、八〇年代は、大学が大きな転換を遂げつつある時期であった。そのことは、決して個人的な感慨に終わるものではないであろう。

#### 〔補説 2〕文学を教える村上春樹

村上春樹の作品は、どの小説も、長編、短編を問わず、版を重ねているようである。けれども、私が知る限りでは、一つ例外がある。『若い読者のための短編小説案内』がそれである。私はこの文庫本を最近買ったばかりである。それは、二〇〇四年の発行で、第一刷と奥付には記されている。それ以後は、二〇一二年の今日まで増刷されていないらしい。この本は、小島信夫、安岡章太郎、庄野潤三など、いわゆる第三の新人などの小説家から、村上が短編を一つ選んで、説明と分析を試みたものである<sup>③</sup>。

今日の若い読者から見ると、地味な作家ばかりで、あまり読まれることはないであろう。さすがに、村上の著作でもそれほど売れていないのであるろう。しかしながら、この本は彼の著書の中でも注目すべきものだと思う。

この本には、「文庫本のための序文」と副題のついた「僕にとつての短編小説」という、かなり長い村上の短編小説論もつけられている。

そこには、「その女から電話がかかってきたとき、僕は台所に立ってスパゲティをゆでているところだった」という一行から、短編小説が生まれ、さらにいかにして二千枚の長編小説になったかという、いかにも村上春樹らしい、また実作者の体験談らしい話も述べられている。

また、「あとがき」のなかでも、教室で学生に要求した三つのことを説明する。最初は、「そのテキストを好きになろうと精一杯努力すること」であるという。

村上が影響を受けた作家というと、アメリカ文学のみが知られてきたが、彼が日本の戦後の小説家をもよく読んでいること、しかも熱心に分析的に読んでいること自体無視できない。

この本は、「アメリカに何年か滞在して、そのあいだにプリンストンなど大学でクラスを持ったこと」がきっかけになったという。

この本は村上流文学教室であって、第三の新人と現代アメリカ小説との意外と思える比較論があるかと思えば、日本の作家への挑発的な言葉もあり、退屈させない。

付録に「読書の手引き」までついている親切さだから、紹介は以上で十分であろう。

#### 注

① 自民党政権さえ危機を言う現在と異なり、当時はまだ、この語は左翼色が残っていたらしい。狼少年的乱用の戒めが、たまたま本学の共同研究を、まさに直撃したのだから。

② 専任研究員のグループとしての活動では、日本の危機を探るため社会見学もいろいろ行った。

大分県の平松知事が行っていた、一村一品運動が注目を集めていたころで、全員が大分にゆき、知事のレクチャーを聴いた。次には、今日ほど觀光化していなかった湯布院へ行った。「村作り」に熱心な若者がいて、同

じくらしい熱心な研究員と夜明けまで議論が続いたものである。

京都郊外の障害者の雇用に積極的だという企業も見学した。この担当者も熱心で、雄弁でもあった。半時間ほどのレクチャーの間に、「付加価値の高い製品」という言葉が、何十回となく出てきたことは忘れがたい。その間、障害者たちは黙々と仕事を続けていた。この時は、労働問題の専門家や、教職員組合の三役クラスの論客の研究員もいたはずだが、何も質問が出なかったことは、記憶に残っている。

③ 本稿を校正中に、小説家安岡章太郎の計報が伝えられた、たまたま見た新聞に、「文体的」には、戦後文学のなかでは一番好きな作家だったという村上春樹の談話も載っている。安岡への村上の関心は、私が思っていた以上に知られているのかもしれない。

安岡章太郎の「アメリカ感情旅行」が新書版で出て、小説家が書いたア

メリカ体験記として、かなり話題になったのは、わたしたちの共同研究より、さらに二〇年ほど前のことだったろう。安岡が好きな作家だとすれば、村上も当然読んでいたろう。だが、安岡の戦中・戦後体験を引きずって鬱屈し屈折した旅行記と、村上のアメリカとは、重なり合うものが少ないだろう。アメリカに関する限り、二人の世代の違いは決定的である。

とはいえ、第三の新人への好みも、第一次戦後派を重視する大江健三郎への対抗意識からのみ来ているとは思われない。それにしても、「文体的に」安岡を好むという言葉は、村上の文学を理解する上に無視できないだろうし、「若い読者のための短編小説案内」の意義は大きいであろう。

(本学名誉教授)